

「ねえ、防災-BOSA I-してる？」

今回私たちは、11月10日（日）に仙台国際センターで行われた「世界防災フォーラム」と「仙台防災未来フォーラム」に参加してきました。防災フォーラムは日本中、世界中から防災に関する研究・技術が仙台に集結し、参加者一人一人が防災や未来について考える場です。また、各国の防災のスペシャリストの方々が一堂に会し、世界全体で防災についての見識を深める重要な場でもあります。災害は、私たちが自然と共生していくうえで避けては通れない道かもしれません。でも、だからこそこの一枚のプリントが、みなさんが防災について考えるきっかけになればいいなと思います。それでは私たちが体験してきたことを紹介しましょう！

【オープニング（世界防災フォーラム）】

世界各国から集まった有識者の方々が壇上で防災についての考えをお話して下さいました。東北大学の今村文彦教授も壇上でお話ししていました。世界各国から参加者が集まるため、英語中心の進行…！思わず圧倒されましたが、専用のイヤホンから逐一日本語訳が聴けたので、抵抗感なくスピーチを聴くことが出来ました。世界に共通する「BOSA I」の意識を直に感じる事が出来て、今回自分たちが参加するフォーラムの重大さを改めて実感。なんと前から五列目という近距離に座らせて頂きました。有難い。

【ワークショップ体験～クロスロードで学ぶ防災～】

◎クロスロードゲームとは

→阪神淡路大震災の体験を元に作成された、ゲーム感覚で出来るディスカッション

被災時に想定される場面と二つの行動の選択肢が提示され、自分ならどちらの行動をとるか、「YES」か「NO」で回答し、グループのメンバーに何故その選択をするか説明します。普段から被災時の行動について考えておくことで、いざというときに選択の引き出しが広がるというメリットがあるこのゲーム。わしん倶楽部代表の田中勢子さんもいらして実際にゲームについて教えて頂きました。多数派の意見も少数派の意見も互いに尊重し合い、自分が気付けなかった一面を知ることで、違う立場の相手を理解することにもつながります。

【NHK制作のドキュメンタリー鑑賞】

NHKさんが制作したドキュメンタリーを英語のみで鑑賞しました。内容は次のようなものでした。高橋奈央さんは中学3年の時に、ALTのティラー・アンダーソンさんと英語弁論大会出場に向けて発音指導を受けたことがきっかけで親しくなり、高校進学後も手紙の交換などを続け、米国の自宅を訪問する約束をしていた間柄でした。子供たちに優しく英語を教えるティラー先生はみんな大好きでした。震災発生時、高橋さんは高校に避難しており無事でしたが、ティラーさんは勤務していた小学校で津波にのみ込まれました。ティラーさんの死は、高橋さんに大きな影響を与え、彼女はティラーさんのように今までよりも外国人と交流を深めるようになりました。映像終了後、高橋さんがステージ上に現れ生の声を聞くことができました。彼女は今薬剤師として毎日忙しい日々を送りながらも、ティラーさんのように強く生きています。

【ブース展示】

各企業、団体、大学が防災の時に対応できる商品や設備、食料などを展示していてとても興味深かったです。特に食事のバリエーションに飽きないぐらいの豊富な避難食に驚きました。チーズケーキや抹茶カップケーキなどもありました。試食したことで避難時にでもおいしく食べられる味のレベルの高さを実感しました。期限が長くなくとも、肉がなくてもツナ缶と小麦粉で作れるナゲット風サバイバル飯なんてものもありました。また、その場に水がなくても、空気から水を作り出せるウォーターサーバーもありました。冷却装置で発生させた結露をため、飲めるように浄化するという仕組みです。停電しても使えるよう、発電機を搭載する装置も登場！被災地での利用が見込めますね。災害地に必ずと言ってもいいほど発生する水不足を、空気が解消してくれるかもしれません。最新型ロボットや子供たちが作る震災俳句など、ほかに興味深いものがたくさんあり、勉強になりました。



声に反応して行動する
ロボット

【クロージング】

私たちは一日の最後にクロージングに参加しました。ステージ上では「防災環境都市・仙台」についての作文と参加したイベントの感想を発表し、防災への思いを共有することができました。会場には、100人以上の参加者が集まっていて、登壇する前は全員、緊張で堅くなっていましたが、エフエム仙台防災・減災プロデューサーを務められている、進行の板橋さんにも助けられながら、各々が伝えなかったことをしっかりと言葉にして話せたと思います。また、ステージ前で発表を聞いてくださっていた参加者の方々も皆、熱心な面持ちでそこから「防災」に対する熱意を強く感じられました。クロージングが終了し降壇した後は、ほっとした様子でお互いのことを労いながら、話し足りなかったことを語り合い、改めて防災への意識を高めることができました。

【作文】当日、クロージングイベントで発表したものです

「防災環境都市・仙台」という言葉を初めて聞いた時、私は堅苦しさを感じ、また、一介の高校生である私からは縁遠い話題のような気がして関心もあまり強くは持てなかった。今回、顧問の勧めや友人からの誘いもあり、仙台防災枠組みについての講演や実際に行われている地域防災の例も拝聴したが、大まかな概要以外まだよく理解できていない。

しかし当初感じていたような親しみにくさは幾分か和らぎ、また地域防災には専門的な知見のみならず、むしろ女性や学生などの斬新な視点が大切になってくるということを知り、だんだんと興味が湧いてきた。特に人材育成やステークホルダーの確保など人に焦点を合わせた取組に非常に魅力を感じた。ただセミナーに参加し私が一番感じたのは、なぜこのような取組が行われていたことを知らなかったのだろうということだ。私の周囲を見渡しても、「防災環境都市・仙台」という言葉が浸透しているようには感じられない。実際、私も今回の機会がなければ、この取組について何も知らず興味も持たないまま大人になっていただろうと思う。私自身の今までの経験を振り返っても、防災の意識を高める取組として避難訓練以外の取組をした覚えがなく、防災に関して現在行われている施策についても関心を持って情報を得ようとしたことがない。

どんなに優れた防災の取組を行っていても、それが広く普及され大勢の人にとって運用、実用できるものでなければその効果は十分に発揮されないと私は思う。「防災環境都市・仙台」という理念は今後も継続されるべきものであるからこそ、

防災への関心が高い人々ばかりではなく私のように防災への意識が高くない人々、その中でも特に未来を担う世代に働きかけを強め、仙台の防災についての取組を認知してもらうことが必要ではないだろうか。

そのためには、教育機関や地域で行われる防災の取組に多様性を出したり、授業の中で、社会において実際に行われている取組について紹介したりするなど、啓発活動をより活性化させることが不可欠だと私は考える。「防災環境都市・仙台」の真の意味での実現とは市民一人一人の間に防災の意識が根付くことだと思う。

(松永 充樹)



おわりに

このフォーラムには、高校生の私達と一緒に小学生の男の子も参加しました。また、会場を見渡すと、老若男女問わず多くの人がいったり、様々な言語が飛び交っていたり…。世代や国境の壁は関係なく、私達は一つの「地球」の未来について考えているような気がしました。果たして将来の私達はどんな防災をしているのでしょうか。未来では今よりも防災意識の高い世界になっているのでしょうか。私はフォーラムに参加して、普段なら中々できない貴重な体験をすることが出来たことを誇りに思うとともに、自分自身の「防災」の見方が変わりました。「防災」と聞くとつい構えてしまいましたが、身近なものであれば、実は食後のデザートのように誰もが思い立って気軽に行えるものなのかな、と思えるようになりました。

最後になりましたが、読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

特別に頂いたブローチ (被災した方の手作りだそうです)



これを溶かせばみそ汁に！！

